

上宮寺通信

第七十号

毒矢の譬え

今年の「大河ドラマ」のもうひとりの主人公・藤原道長は臨終の時、極楽浄土への往生を願い、頭を北にして顔は西の方角を向き、手には阿弥陀如来像と結ばれた五色の糸が握られています。たといわれています。

「人は死んだらどうなるのか」これは人間にとって大きな疑問であることは間違いありません。お釈迦様の弟子のマールンキヤという方もその一人でした。

あるとき、お釈迦様に「人は死んだらどうなるのでしょうか。死後の世界はあるのでしょうか」と質問をしました。さら

に、「もしこの質問に答えてくれないならば、私はお釈迦様の弟子を辞めます」とも言ったのです。

それに対しお釈迦様は静かにこう答えました。「たとえば、毒矢で射られた人が『この矢はどこから飛んできたのか？どんな人が射たのか？名前は？性別は？若いか年寄なのか？これらのことがわかるまで矢を抜かない。私はそれが知りたいのだ！』と言っていたらどうなるか。その人はそのうちに毒がまわって死んでしまうだろう。マールンキヤよ、あなたの質問はそれと同じなのです。もし、死後の世界についての答えを聞けないと修行ができないというならば、あなたはいつまで経っても『人生の苦しみ』から解放さ

れることはありません。私が説く教えは、『人生の苦しみ』からの解放です」。

このことは、お釈迦様が説かれる教えは、私たちの知的好奇心や関心を満たすためのものではなく、また知識を増やすためのものでもなく、私たちの根源的な苦しみ(生老病死)からの解放を目指すものであるということを示しています。

浄土真宗は「念仏申せば仏になる」という教えです。現世で仏になることは不可能ですが、仏になるのは命を終えて浄土に往生してからということになります。ですから一見、死後の世界を説いているようですが、実は現世での生き方を問題にしています。

命を終える時に藤原道長のように仏様にすがって行く末を案じるのではなく、「ああ良かったな」といえる人生を送り、あとは阿弥陀様にお任せする。これが本当に大事なことなのではないのでしょうか。



